二〇二二年度　入学試験問題

文学部A方式I日程・経営学部A方式I日程・人間環境学部A方式・GIS（グローバル教養学部）A方式

二限　国　語（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　志望学部・学科によって解答する問題が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。

四　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

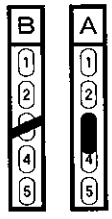
マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

㈠　正しいマークの例

㈡　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの各文のカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

1 職務タイマンのそしりを受ける。

2 多額のフサイをかかえて倒産する。

3 疑惑のフッショクに努める。

4 超大国にレイゾクする。

問二 つぎの中から言葉の用法に誤りを含んだ文を二つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 彼の非礼な態度に接し、私は怒り心頭に発した。

イ 彼の的を射た発言に一同は納得した。

ウ 勤勉な両親は寸暇を惜しまず働いた。

エ これまで黙っていた社長はおもむろに口を開いた。

オ 私の兄は弱冠四十歳で一流企業の社長になった。

カ 彼女の風変わりな衣装に人々は眉をひそめた。

問三　つぎの作家の作品名をそれぞれ一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

1　谷崎潤一郎

ア　或る女　　イ　田舎教師　　ウ　外科室　　エ　細雪　　オ　和解

2　中島敦

ア　金閣寺　　イ　草枕　　ウ　春琴抄　　エ　廃市　　オ　李陵

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

話し言葉を腐葉土にたとえ、言葉の密度や〈言葉の垢落し〉について語ったのはフランスの詩人フランシス・ポンジュだが、わたしはこのような言葉の感じ方に、たいへん共感をもっている。話し言葉がながいあいだ話されてきたあいだに身につけてきたにおいのようなもの、まるみのようなもの、そして雑多で猥雑ですらあるが有機質に富んだ堆積を、この腐葉土という言葉は意味しているかのようだ。そこにふくまれる時間の要素は、無機的な時間ではなく、一度死んだ植物を〈腐蝕〉させ、〈発酵〉させ、徐々に〈変質〉させることで、新しい〈甦り〉にもつながる周期的な時間なのである。

女言葉についても、地方や時代によってさまざまな、腐葉土のような言葉があったにちがいないし、いまもあるにちがいない。それはわたしの内部にも、意識下の層のようなものとして存在しているとさえ言うことができる。だが少なくともわたしの生まれて育った東京についていえば、その言葉は腐葉土が堆積する途中で何回もの[1]人工的な地すべりや断層を経験した言葉であるように思えるのだ。

わたしが幼年時代から戦争のはじまる小学校時代にかけて経験したのは、[2]女の子の言葉というものが奇妙に語尾の問題に集約されて、形骸化させられていった時代だった。それは、〈良妻賢母〉から〈大和なでしこ〉へ、さらに〈軍国の花嫁〉へと、女性のイメージが人工的・強制的につくりかえられ、ぬり変えられていった時代でもあった。そういう時代の動きをよく知っていたわけでもなく、それにたいする反撥（はんぱつ）を意識的に感じていたとも思えないが、わたしの家では、子供たちはみんなどういうわけか男の子のような言葉を好んで使っていた。そこにはいま考えると、そのころの〈女の子らしさ〉への反撥という一面がなかったとは言い切れない。

戦後、わたしは日本女子大の附属女学校へはいり、そこで戦前のある時期の、形骸化された人工的な女言葉の一つ、いわゆる〈あそばせ言葉〉の亡霊のようなものに触れる機会をもった。さすがにあそばせ言葉は戦後の混乱した、食糧不足の世情のなかではなんとも時代ばなれのした、こっけいな印象しか与えず、わたしたちはなかば骨董的な興味さえ混（まじ）えてその種の言葉を

ときおりもてあそんでいただけだった。しかし戦後何年かはお作法の時間というものがあり、いまでも多分そうだと思うが、女の子を一定の無難な枠組のなかにはめこんでおこうとする企てには、根づよいものがあった。小笠原流のお作法の先生が、「お姑さんが烏は白いといったら、烏は白いのです」といったのを覚えている。中学や高校の友人たちには、家庭できちんとしたしつけやお稽古事を習っている人たちも多く、その言葉もきちんとした、折目正しい東京の女言葉であったように記憶する。ただ、いかにも深窓に育ったお嬢さんという感じの彼女らが、戦後しばらくのあいだどこか浮かない顔付をしていたのにくらべて、戦後という時代をもう少し活発に生き、職業なども身につけていったのは、たとえその職業がお稽古事の延長であったとしても、むしろ比較的雑駁に育ってきた、わたしなどにも環境の近い小市民の家庭の出身者だったように思う。

両親が地方出のためもあり、戦争期ということもあって、わたしは東京の、おそらく江戸時代からつづいてきた礼儀作法や言葉づかいをあまりよく知らないまま育ってしまったのだが、このような断絶は、家庭環境のせいばかりではなく、時代環境がつよく作用している。そして戦後という時代だけがそうした断絶の責任を負わされるべきではなく、むしろそれ以上に、昭和のはじめごろから戦争期にかけて学校教育や家庭教育を通して行われた、形骸化された〈女らしさ〉の強制が、真に〈人間らしさ〉と結びついた〈女らしさ〉の根を断ち切り、地下水を涸らしてしまったように思えてならない。

なぜなら、明治生まれの女の人たちのあいだには、それぞれの地方のなまりをいくぶんかは残しながらも、生き生きとした標準語といえる言葉が話されていたように思えるからだ。それは大正期のいわゆる山の手言葉ともちがっていた。わたしはその時代には、新しい日本人の共通の活動的な話し言葉が形成される可能性があったのではないかと思う。だが皮相的なモダニズムと形骸化された〈女らしさ〉や女言葉の強制の時代を経て、戦後の標準語は奇妙に薬くさい、いわば体臭のない言葉になってきたのではないだろうか。書き言葉としては翻訳の影響もあって、論理的なことや複雑なことが言える言葉にはなったが、書かれている内容はいぜんとして論理的というよりはムード的・情緒的だ。そして現在の東京で話されている言葉、ことに女の人の言葉は、たとえその世界は狭くかぎられているとしても、方言のもつリアリティにやはりどうしてもかなわないところがあるのではないかと思う。

わたしは詩やエッセイを書いていく上で、最初はできるだけ透明な言葉、論理的な言葉、いわば体臭のない言葉を意識して求めた時期があった。それはいわゆる女らしい言葉を日常生活でそれほど強いられてこなかったため自然にそうなった面もあるが、同時に日本人の言葉や態度のもっていた封建的というか、アジア的ともいえる陰湿なニュアンスに反撥したためでもあった。ことにいわゆる女らしい言葉を武器にすることには、つよい抵抗があった。学生時代のはじめごろ、一緒に雑誌を出す活動をしていた女の友だちが、女らしい言葉や身振りでちょっとしたときに得をしてしまう自分がとてもいやだ、と真剣に話していたのをおぼえているが、彼女はそのとき、自分が身につけてきた女らしい言葉や身振りが、弱さの表現でしかないことを自覚していたのだと思う。わたしたちは一緒に雑誌を出す運動のなかで、そういう〈女らしさ〉を男の学生たちとも一緒になって否定していこうとしていたが、そのなかで、自分たちでなにかを企てて実行しようとすることをなにかにつけて押さえつけられてきた高校までの女子教育の枠のなかで、男の学生とのあいだにすでにかなりの社会的能力の差がつくりだされてしまっていることに、気がつかなければならなかった。

現在のわたしは、ほんとうに言葉の垢落しをし、言葉をよみがえらせるためには、言葉を透明化するだけでは足りないと考えている。言葉のもつ腐葉土のような不透明さ、その語られてきた歴史の密度とほんとうに関わることなしには、言葉の垢落しをすることさえできないと思う。だがそれは形骸としての〈女らしさ〉や、手段や武器や特権としての〈女らしさ〉を身につけることではなく、女が生活のなかで背負ってきた歴史とまともにつきあうことだとわたしは思う。女が女としての性や欲望や素質を否定しないで生きようとするときに引き受けなければならない生活のなかには、人類の歴史の限界が宿っているため、そこにはまだ社会化されない、腐葉土のような言葉がたくさん堆積しているのだ。

最近の日本では、テレビなどの影響でしだいに方言が各地域で聞かれなくなってきているという。おそらくこのような趨勢（すうせい）は、簡単には止まらないだろう。また男の言葉と女の言葉がしだいに近くなり、混りあってくるということも、ある程度歴史の必然だと思う。ただわたしたちは、標準語にしても、女言葉にしても、これまであまりにも外から、あるいは上から与えられた枠組に忠実にしたがってきたのではないだろうか。内発的で自発的な、自分たちのあいだからつくりだされてくる、身振

りとも結びついた言語が少なかったのではないだろうか。現在では権力や家族制度による直接の強制というより、テレビなどのマスコミ文化による言葉の［A］化、語彙の貧困化がすすんでいる。そして自分では自発的だと思っていても、じつは外から与えられた言葉をしゃべっていることも意外に多い。新聞の言葉、テレビの言葉、街で話されている言葉などを見聞きしていると、やがて日本人のあいだには言葉らしい言葉がなくなっていくのではないかという恐怖のようなものさえ感じることがある。言葉の貧困化は頭脳と思考の貧困化のあらわれである。生き生きした言葉は対等な、生きた人間同士のあいだからしか生まれない。その意味で、[3]現代の日本人の言葉はたしかに病んでいる。

（高良留美子『失われた言葉を求めて』より）

問一　傍線部1「人工的な地すべりや断層を経験した言葉」とあるが、「人工的な地すべりや断層」を経験する過程で生まれた言葉に当てはまるものを、つぎの中から二つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　戦後の標準語　　イ　透明な言葉　　ウ　論理的な言葉

エ　方言　　オ　いわゆる〈あそばせ言葉〉

問二　傍線部2「女の子の言葉というものが奇妙に語尾の問題に集約されて、形骸化させられていった」という経験が語られているが、女性が真に人間らしい言葉を取り戻すためには、どのようなことが必要だと筆者は述べているか。二十五字以上三十字以内で本文中より抜き出し、最初の五文字を解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問三　空欄［A］に当てはまる語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　戯画　　イ　矮小　　ウ　表面　　エ　差別　　オ　画一

問四　傍線部3「現代の日本人の言葉はたしかに病んでいる」とあるが、なぜそのように言えるか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　自発的に話しているつもりでも、実は他から強要された言葉で話しており、それは生き生きした言葉とはいえないから。

イ　誰もが同じような語彙しか持たず、あまり頭を働かせないで話しており、それは生き生きした言葉とはいえないから。

ウ　人々の間に対等の関係が成り立ちにくく、言葉が一方通行になりがちで、それは生き生きした言葉とはいえないから。

エ　マスコミやテレビの言葉は内容が空疎で人を傷つけるものが多く、生きた人間同士の交す言葉とはいえないから。

オ　言葉を発するとき、豊かな表情やしぐさを伴うことが少ないため、それは生きた人間同士の交す言葉とはいえないから。

問五　つぎの中から、本文で述べられている内容と合致するものを二つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　筆者がかつて透明な言葉を求めていたのは、方言に含まれるようなむだな装飾を嫌っていたためである。

イ　方言には、言葉が体制によって形骸化される以前のリアリティがあるため、感傷的な内容を表現するのに適している。

ウ　女性の言葉に対する強制は弱まったが、メディアが発達した現在では、言葉の均質化が進行するのは避けがたい。

エ　これからの女性は与えられた言葉の枠組を脱し、男性と対等に話すために論理性を磨いていかねばならない。

オ　強制された女らしい言葉や身振りは、女性の武器や特権と見えることもあるが、実際には弱さの表現でしかない。

問六　文中で使われている「腐葉土のような言葉」とは、どのような言葉か。筆者の主張を踏まえて解答欄に四十字以内で説明せよ。ただし、句読点も一字と数える。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

西行法師、男なりける時、①かなしくしける女の、三、四ばかりなりけるが、重くわづらひて、限りなりけるころ、院の北面のものども、弓射て遊びあへりけるにいざなはれて、心ならず②ののしりくらしけるに、郎等男の走りて、耳にものをささやきければ、心知らぬ人は、なにとも思ひいれず。西住法師、いまだ男にて、源次兵衛尉とてありけるに、目を見合せて、「A このことこそすでに」とうちいひて、人にも知らせず、さりげなく、いささかの気色もかはらでゐたりし、i ありがたき心なりとぞ、西住、のちに人に語りける。

これらは、さまこそかはれiii ども、みなものに耐へ忍ぶるたぐひなり。心をもてしづめぬ人は、なにごともはなばなしく、けしからぬあやしの賤の女などが、もの歎きたる声、気色は、隣里も苦しく、いかでか耐へむと聞ゆれども、一日二日などに過ぎず。のちには、a さる気ありつるかとだに思はぬこそ、あさましけれ。

また、女のものねたみ、同じく忍びつつしむべし。いやしきはいはず、ことよろしき人の中にも、そのかたのすすむ人につけては、むくつけなく、b うたてき名を残すなり。なかにも后は螽斯、毛詩の喩、おはしましき。ものねたみし給はぬこと、本文に見えたれども、B それしもえしのび給はず。

（『十訓抄』より）

【注】 ＊男なりける時　在俗の時。
＊隣里　隣の村（家）。
＊螽斯、毛詩の喩　イナゴの類のように子孫が繁栄するという、『毛詩（詩経）』国風・周南篇にみえる喩え。
＊本文　中国の書物の文章。

問一　傍線部①「かなしくしける」②「ののしり」の解釈として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

①　ア　かわいがっていた　　イ　心配していた　　ウ　辛く感じていた
　　エ　同情していた　　オ　見捨てていた

②　ア　うわさをして　　イ　騒いで　　ウ　怒鳴って
　　エ　馬鹿にして　　オ　反感を持って

問二　傍線部A「このことこそすでに」とあるが、どのような意味か。「このこと」の内容と、「すでに」の下に省略されている内容が具体的にわかるように解答欄に二十字以内で説明せよ。ただし、句読点も一字と数える。

問三　傍線部a「さる」b「うたてき」の品詞として正しいものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　感動詞　　イ　接続詞　　ウ　連体詞　　エ　動詞　　オ　形容詞
カ　形容動詞　　キ　副詞　　ク　助動詞　　ケ　助詞　　コ　名詞

問四　傍線部i「し」ii「なり」iii「かはれ」の活用形として正しいものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　未然形　　イ　連用形　　ウ　終止形　　エ　連体形　　オ　已然形　　カ　命令形

問五　傍線部B「それしもえしのび給はず」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　それでさえも昔の出来事を懐かしむことをなさらない。
イ　それでさえも亡き人を懐かしむことをなさらない。
ウ　それでさえも好きな人を恋い慕うことをなさらない。
エ　それでさえも嫉妬心を慎むことがおできにならない。
オ　それでさえも悪口を言う気持ちを慎むことがおできにならない。

問六　つぎの中から本文の内容と合致するものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　西行法師は大変な知らせを受けても、その場の雰囲気を壊すまいと、さとられぬように慌てずに遊び続けた。
イ　西行法師は早く帰るよう言われたのに、猟が楽しくて遊び続けていたため、西住法師に非難されてしまった。
ウ　西行法師と西住法師は言葉を交わさなくても心が通じ合ったので、この良き人間関係は後世に語り継がれた。
エ　身分の低い女は心を鎮められず大騒ぎをして嘆くが、周囲の者たちは相手にしないので、誰にも実害はない。
オ　身分の低い女はわがままな心を抑制できないが、身分の高い女は分別があるので、大騒ぎをすることはない。

問七　『十訓抄』の成立した時代として正しいものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　奈良時代　　イ　平安時代　　ウ　鎌倉時代　　エ　室町時代　　オ　江戸時代

つぎの問題〔四〕は、文学部を志望する受験者のみ解答せよ。

〔四〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

柳下恵処レ魯、三黜而不レ去。憂レ民救レ乱。妻曰、無二乃瀆レ乎。君子有二二恥。国無レ道而貴、恥也。国有レ道賤、恥也。今当二乱世、三黜而不レ去、亦近レ A 也。柳下恵曰、油油之民、将レ陥二於害。吾能已乎。且彼為レ彼、我為レ我。彼雖二裸裎一安能汚レ我。油油然与レ之処、仕二於下位。

柳下既死。門人将レ誄レ之、妻曰、将レ誄二夫子之徳一耶。則二三子不如妾知之也。乃誄曰、夫子之信誠、而与レ人無レ害兮。蒙レ恥救レ民、徳弥大兮。雖レ遇二三黜、終不レ蔽兮。嗟乎惜哉、乃下レ世兮。庶二幾遐年一、今遂逝兮。嗚呼哀哉、魂神泄兮。門人従レ之、以為レ誄。

（『列女伝』より。文章を一部省略した）

【注】 ＊魯　中国古代の国名。都は曲阜(現在の山東省)。孔子の生まれた国。
＊瀆　「汚」に同じ。
＊油油　態度が穏やかで慎みのあるさま。
＊裸裎　まるはだかになる。「裎」は、衣をつけないこと。無礼なふるまいをすることの喩え。
＊誄　弔辞の一種。死者の生前の徳を讃えて、哀悼する有韻の文。またその文を作ること。
＊遐年　長生き、長寿。「遐」は遙かの意。
＊泄　「去」に同じ。

問一　空欄 A に入る語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　道　　イ　恥　　ウ　賤　　エ　貴　　オ　瀆

問二　傍線部①「吾能已乎」のひらがなのみの書き下し文として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　われよくするのみか。　　イ　わがのうやむか。　　ウ　われよくやまんや。
エ　われすでにあたふるか。　　オ　わがのうなるのみや。

問三　傍線部②「之」は何を指すか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　妻　　イ　徳　　ウ　我　　エ　民　　オ　恥

問四　傍線部③「二三子不如妾知之也」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　数人の門人は、誄の書き方を私よりよく知っています。
イ　夫のことは、私の方があなたたちよりよく知っています。
ウ　私の方があなたたちより、誄について詳しいと思います。
エ　徳とは何かについて、あなたたちの理解は私に及びません。
オ　数人の門人は、徳について、私と同様よくわかっていません。

問五　傍線部④「門人従之」とあるが、その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　柳下恵の妻が誄の中で夫の死を非常に悲しんでおり、門人は彼女を励ましそうとしたから。
イ　門人は、三回役職を退けられたことは、かえって柳下恵の名誉になると考えたから。
ウ　柳下恵の妻が夫の三回の左遷を誄の中で恨みがましく書いていて、門人はそれに共感したから。
エ　柳下恵の妻の作成した誄が、夫の徳を見事に表現し、誄として優れていたから。
オ　門人は、柳下恵が三回の左遷を受け入れ、屈辱に甘んじたことを残念に思っていたから。

問六　つぎの中から本文の内容と合致するものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　柳下恵の妻は、最初、夫が下級役人に甘んじるのを批判したが、最後は高く評価した。
イ　柳下恵の妻は、他人が夫に対して無礼なふるまいをすることに憤慨した。
ウ　柳下恵は、いくら人に批判されても聞く耳を持たず、唯我独尊の態度を貫いた。
エ　柳下恵は、三回も役職から退けられたが、民の為に尽して最後は出世した。
オ　柳下恵の妻は、夫が三回役職から退けられても、終始一貫、夫を尊敬していた。

つぎの問題〔五〕は、経営学部・人間環境学部・GIS（グローバル教養学部）を志望する受験者のみ解答せよ。

〔五〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

古代の大阪は、固い洪積*層の上に、その歴史を刻んできた。南北に向かって大阪湾に突き出た大きな岬である上町台地と、生駒山の山麓に南北方向に広がる台地が、古代人の主な生活の場所だった。そのうち大和川の運ぶ土砂によって、河内潟がしだいに埋められてくると、そこには水田が開かれて、小さな村々が点在するようになった。

そこには、①古代的なものの考えをする、古代人が住んでいた。古代人の思考法の特徴は、あらゆる物事の中に宿る「タマ＝霊力」の実在を、強く感じるところにある。人の心にはタマが宿っていて、タマが強く発動するときには、心は激しく動き、タマが不活性なときには、心も深く沈み込むようになる。

タマは人間だけに宿っているのではなく、動物にも植物にも、岩や水のような自然物にも宿っている。タマは流動体のように移動して、ほかの個体の中に、するすると入り込むこともできた。それだから、人の心は、動物や植物にも心をつないでいくことができると考えられていたし、自然の運行に影響を与えることもできるとされた。

古代人には、自然や宇宙から孤立している「個人」というものは、考えられなかった。目に見えないタマをとおして、人間同士もともとつながりあっているからだ。さらには、人格から完全に切り離された、「ただの物」というものも、考えられない。そのために、所有物とその持ち主の人格は、タマをとおしてつながりあっているとも感じられていた。

そういう古代人の世界では、あらゆる物の交換が、「贈与」と考えられていた。贈り物をするとき、現代の私たちでさえも、ただのチョコレートに思いを込めたりするが、古代人にあっては、すべての贈り物には、贈り主の人格の一部がタマとして付着したままのかたちで、相手に届けられていた。そうやって、物の交換をつうじて、人と人が結びつく。そのたびに人々は、タマの流動を感じて、幸せな気持ちになった。

ところが、その古代人の世界にも、すでに「商人」は活動していたのである。商人は最初の［A］主義者として、物に宿っていたタマを、物から切り離すことのできる人たちだった。自分たちが扱う商品は、誰かの人格の一部であるタマと結びついているから、価値があるのではなく、何かじっさいの使用に役立つからこそ価値がある、と商人は考えることができた。

商人は、人と物とを「無縁」にする原理にしたがって生きようとした、最初の近代人である。そういうことにかけては人一倍敏感な古代人は、②商人の考え方のなかに潜んでいる無縁の原理が、いずれは人と人のつながりまでも無縁化して、社会を破壊してしまう力を秘めているものとして、恐れたのである。

商品が交換されるとき、世界に活気が充ちてくるように感じられるのは、タマが活発に動くからではなく、商品同士の交換が頻繁に起こり、そのつど儲けが発生するからであり、だからこそ喜びがわいてくる。このような考え方をする商人は、古代人の社会では、まだ小さな勢力しかもたない、どちらかというと孤立した集団にすぎなかった。むしろ、古代社会はそういう商人の活動に、強い制限を加えることによって、［B］社会を、保とうとしていた。

古代人は堅固な洪積層の上に、彼らの共同体をつくるのを好んだ。共同体の中で生きる人々をつないでいるのは、贈与の関係が育てる、自然な愛や信頼の感情である。そこに商品というものに潜んでいる無縁の原理が入り込んでくると、古代人の共同体は、解体の危機におびやかされかねない。そこで古代人は、商人を共同体の中には住まわせないようにしたのだった。

こうして、古代から中世にかけて、商人たちは、村から村を歩き渡る行商人として、商売をおこなった。彼らは多くの場合、堅固な洪積層の上に、市場が付属している彼らの町をつくって住むことを、長いこと許されなかったから、川縁の荒れ地や河の中州や、河口にできた砂州島などに、集まって住んだ。そして、そこから、近世の資本主義の発達ははじまった。

洪積層の台地には、社会は形成されるけれども、資本主義は生まれにくい。権力者の居城は築かれるけれども、よく発達した市場をもつ都市が、洪積台地の上に自然発生することは、めったに起こらないことなのだ。考えてみれば、パリでもロンドンでも、純粋な大都市はたいてい、中州や砂州につくられたものだが、そういう場所でなければ、人と土地の結びつきとか、人と物の霊的な絆などというものを否定できる、無縁の原理が開花することなどは、できなかったからである。

大阪の地勢には、そういう資本主義の原理が、③自由闊達な活動をおこなえるような舞台が、みごとに準備されていた。生みの母は淀川である。淀川が運び込んだ、おびただしい土砂は、河口に多くの砂州をつくりだし、それはいつしか島となり、その島の上に、資本主義の原理が、川辺の葦のように根を下ろしていった。「ナニワ」と呼ばれることになったその地勢こそが、上町台地と河内世界にかたちづくられた古代人の世界を食い破って、大阪に資本主義が発達していく舞台をしつらえた。

そのナニワは、もともとそこにできていたものではなく、水底から、ゆっくりと生まれてきた場所なのである。上町台地の東と西に、たくさんの島が生まれていた。④商都大阪の原型となる「八十島のナニワ」が、こうして時間をかけて、ゆっくりと水底から生成してきたのである。

（中沢新一「大阪アースダイバー」より。文章を一部改変した）

【注】 ＊洪積層　約一八〇万年前から一万年前までの年代の地層。

問一　傍線部①「古代的なものの考え」とあるが、その説明として、本文の内容に照らして適切でないものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　あらゆる物事にはタマが宿り、個体をこえて流動するため、個々はタマを通して心をつなぎ得る。

イ　タマは不可視の霊力であり、人間だけでなく、動物や植物、そして無生物にもやどっている。

ウ　タマを共有する共同体の中に「個人」という考え方はないので、一人一人は個性的な人格を持たない。

エ　物を贈るという行為は、贈り主の人格の一部であるタマを物に付けて相手に届けることを意味する。

オ　贈与により、タマが盛んに流動することで、共同体の中で愛や信頼の感情が育まれ、幸福感が増す。

問二　傍線部②「商人の考え方」とあるが、その説明として、本文の内容と合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　この世にタマなどというものは現実には存在せず、したがって人と物とは、無関係なものである。
イ　物が価値ある商品となるのは、何かに役立つからであり、人格の一部であるタマが宿るからではない。
ウ　一か所に定住するよりも、行商として未開地を渡り歩いたほうが、商いで儲けるチャンスも増える。
エ　洪積層の台地より、川が新しくつくる砂州のほうが、自然環境として人と物の霊的な絆を否定しやすい。
オ　商品そのものの、実用的な価値の交換による儲けさえあれば幸せになれ、人間関係などは必要ない。

問三　空欄 A に入る語句として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　合理　　イ　原理　　ウ　競争　　エ　平等　　オ　民主

問四　空欄 B に入る表現として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　堅固な土地に定住できる
イ　タマの力で富を独占する
ウ　タマの庇護から自立した
エ　人々の心の絆でできた
オ　身分や貧富の差がない

問五　傍線部③「自由闊達」とあるが、「闊達」に最も意味が近い語句をつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　開明　　イ　活発　　ウ　洒脱　　エ　饒舌　　オ　磊落

問六　傍線部④「商都大阪」の形成についての説明として、最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　大阪では、資本主義の発達にあわせたかのように、ちょうどその勃興期の近世以降、水底からたくさんの島々が生成し始めた。

イ　古代の大阪における商人の位置付けの歴史的な変化は、世界の資本主義の発達史のなかでも、みごとに典型的な経過をたどっている。

ウ　大阪では、古代的な共同体が占拠して商人を容れなかった洪積台地に対して、自然が、商人の活躍できる土台をゆっくりと生成してくれた。

エ　「無縁」の原理を信奉する人々が、長い間努力を重ねて淀川沿いの川辺を埋め立てて、「八十島のナニワ」という新天地を形成していった。

オ　商都大阪の原型は、一権力者によってつくられたのではなく、商人が意識的に淀川の力を活かしたことによって、自然との共同作業で生成された。